

# SINUSOID NEWS

## 肝類洞壁細胞研究会ニュース

第2号  
2004年6月発行

### 目次

- ・第18回肝類洞壁細胞研究会のお知らせ…………… 白鳥康史…………… P1
- ・第12回国際肝類洞壁細胞シンポジウム・プログラム委員会報告…………… 内藤 眞…………… P1
- ・ビルバオ日記…………… 内藤 眞…………… P3
- ・日本の皆様へ……………Fernanndo Vidal Vanaclocha…………… P5
- ・私の2つの小冊子…………… 谷川久一…………… P6
- ・編集後記…………… 和氣健二郎…………… P6

### 第18回肝類洞壁細胞研究会のお知らせ

第18回肝類洞壁細胞研究会を下記の日程で開催いたします。

会期：平成16年11月27日(土)～28日(日)

会場：新大阪ワシントンプラザホテル  
ルミエール

本来であれば岡山で開催するところですが、師走間近の忙しい時期のため、交通の便を考え、新大阪で開催することにいたしました。ぜひとも多数のご参加をいただきますようお知らせいたします。

尚、特別講演、演題募集要項に関しては、現在未定です。決定次第、会員の皆様に連絡申し上げます。

第18回当番世話人  
岡山大学 消化器・肝臓・感染症内科  
白鳥康史



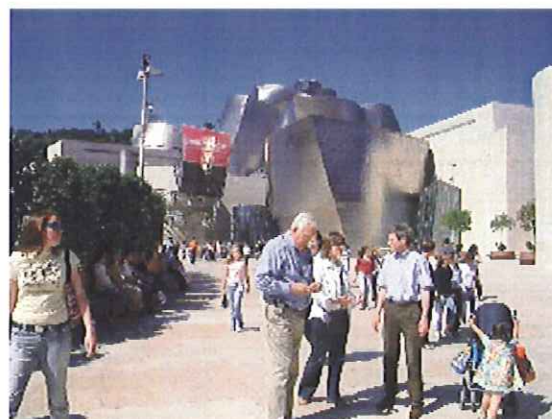
### 第12回国際肝類洞壁細胞シンポジウム・プログラム委員会報告

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
分子細胞病理学分野  
内藤 眞

6月3日から6日まで、第12回国際肝類洞壁細胞シンポジウムのプログラムを作成するため、scientific committeeの日本代表の一員としてビルバオに行ってきました。

プログラムの詳細は近くホームページ

(<http://www.ehu.es/XII-ischs-2004/>)で公開される手はずですが、基本的な内容をお知らせいたします。



会場のGuggenheim美術館を視察する委員

プログラム大綱は下記のとおりですが、注意点は

1. 口演の会場はGuggenheim美術館であり、ポスター会場はホテルErcillaである。
2. 両者は徒歩で15分であるが、バスも用意されている。
3. 招待講演 20分、一般講演 15分（質疑を含む）。美術館の使用規定が厳しいので、口演は時間厳守。
4. ポスター発表はセッションによって質疑応答時間が決められているので、その時間はポスターの前にいること。
5. スペインのお昼は午後2時から4時までが普通。午後の仕事は4時から8時で、シンポジウムもそのリズムで開催される。日本人は最初とまどうものと思われる。
6. 朝は早く、夜は遅い。次の日に差し支えないよう注意。
7. 9月はバカンス客で賑わうので、まだシンポジウムで確保してある**ホテルの予約を急ぐこと**（Ercilla Hotelがお勧め。便利さでも食事のおいしさからも）。

#### プログラム大綱

##### 9月5日（日）Ercilla Hotel

- 15:00-19:30 登録  
 19:30 開会  
 19:45 歓迎会/ポスター展示（ポスターはそのままホテルに貼っておく）

##### 9月6日（月）Guggenheim美術館

- 8:30-10:30 Session I: 内皮細胞  
 コーヒーブレイク  
 11:00-13:00 Session II: 内皮細胞  
 13:30 昼食 **Ercilla Hotel**（バス、徒歩15分）  
 14:45-16:00 ポスター質疑(Group Aの発表者はポスターの前にいること。**Ercilla Hotel**)  
 16:30-18:30 Session III: 肝免疫  
 19:30 Guggenheim美術館見学  
 20:30 ディナー Guggenheim美術館レストラン

##### 9月7日（火）Guggenheim美術館

- 8:30-10:30 Session IV: 癌と血管新生  
 コーヒーブレイク  
 11:00-12:00 Session V: 癌と血管新生  
 12:00-13:00 総会  
 13:30 昼食 **Ercilla Hotel**（バス、徒歩でも15分）  
 14:45-16:00 ポスター（Group B,C質疑）  
**Ercilla Hotel**  
 16:30 近郊へのツアー  
 20:30 ディナー Cider Place

##### 9月8日（水）Guggenheim美術館

- 8:30-10:30 Session VI: 肝星細胞と線維化  
 コーヒーブレイク  
 11:00-13:00 Session VII: 肝星細胞と線維化  
 13:30 昼食 **Ercilla Hotel**（バス、徒歩15分）  
 14:45-16:00 ポスター(Group D,Eの発表者はポスター質疑) **Ercilla Hotel**  
 16:30-18:30 Session VIII: 肝星細胞と線維化  
 20:00 バスでArtaza Palaceの晩餐会へ

##### 9月9日（木）Guggenheim美術館

- 8:30-9:30 特別講演  
 9:30-10:30 Session IX: 炎症と肝障害  
 コーヒーブレイク  
 11:00-12:30 Session X: 炎症と肝障害  
 12:30 閉会



ビルバオ港の町並



ビルバオの風車公園

## ビルバオ日記

内藤 眞

6月3日

成田からパリのシャルルドゴール空港まで 13 時間。夜間飛行は疲れたが、予定通り到着。朝の 4 時で外は真っ暗。巨大でモダンな空港である。ターミナル 2Fホールに着いてBホールにシャトルバスで移動するはずが、まだシャトルバスが運行されていない。皆待っているの、いつ来るかわからないバスを 1 時間半待合室で待ち、空が明るくなってからやっとBホールへ移動。そこでもまだチェックイン業務が始まっておらず、待つ。この空港の接続はよくないと Fernando の話。でも、これが一番私の予定に近い便だったのだからしょうがない。次回はフランクフルト経由にするか、少なくともこの時間帯はやめよう。小さなジェット機でビルバオへ。



シャルルドゴール空港からビルバオへ

1 時間半で到着。モダンな Bilbao 空港。Fernando 教授のスタッフ、Bea と Elvira が出迎えてくれた。気さくで明るい女性。Fernando の両腕となる有能なスタッフである。



出迎えてくれたエルビラ

20℃ あるかないかの爽やかな気候。地中海性の気候で夏も冬も過ごしやすいという。しかし、先週末までは寒くて雨で、私たちが好天を運んできたようだと言った。30分でビルバオ。町の入り口にグッゲンハイム美術館が橋を下から抱え上げるように両側にそびえていた。現代美術というのか、変わった建物で、私には軍艦のように見えた。



グッゲンハイム美術館

街中のホテル・Ercilla に案内され、夕食まで休む。疲れていたの、3時間ほど眠ったが、子供の歓声で目をさます。すぐ近くに学校があるという。曇り空がすっかり晴れ上がってすばらしい天気。ホテルには McCuskey (ボブ)、Smedsrod (パート)、私と Fernando の 4 人が集まった。



ホテルのロビーで (左から Fernando の技官、Smedsrod、Bea、McCuskey、筆者)

ホテルロビーでビールを飲みながら Fernando を待ち、久しぶりの再会。4人で田舎のレストランへ。大きなワインの樽があり、その蛇口をあけると小便小僧のごとくリングサイダーが流れ出した。客も慣れたもので、自分でやっている。すこし苦いがけっこうおいしいものだった。タラ料理、ステーキにトマトソースをかけていただいたが、そのソースが絶品。またソーセージもややすっぱい味だが大変おいしかった。これでエネルギーは十分補充。



アップルサイダーを上手にグラスに受ける

今回の学会の参加状況は現在 98 人。うち招待演者が 26 人。同伴者は 20 人。抄録は 77。国別では日本 23、ニュージーランド 1、台湾 1、アメリカ 13、オーストラリア 3、ヨーロッパ 57。その内訳はスペイン 22、イギリス 9、ノルウェー 7、ドイツ 7、イタリア 3、フランス 2、ベルギー 2、オランダ、ウズベキスタン、ギリシャが各 1、そしてロシア 2 である。会長としては日本からもっと参加者を期待している。そのため、ポスターの申し込み期限は 7 月まで延ばしてもよい、とのこと。ポスター賞も準備するので、私は賞金よりも立派な賞状が大事と主張した。しかし、若いお金のない研究者に支援することも大事で、その準備もしているという。シンポジウム後に本 (Proceeding) を作るより、その方が大事だということで意見が一致。その方が、最新の内容を発表することができる。私も若い教室員を連れてきてポスター発表させよう。

レストランの中は若い人たち（Fernando は学生だという）であふれてきた。愉快地に歌い始め、夜は 12 時近くになっていた。



肉を分ける Fernando 会長

6月4日

今日の検討資料に目を通し、朝食。ホテルのレストランではいろいろな種類のハム、ベーコン、ソーセージに野菜、パン、果物、お菓子など、盛り沢山。文句なしにおいしい。ジュースはオレンジと何か2種類だが、オレンジはしぼりたて。ミルクが大きな容器に入っていた。私は冷たいのは駄目なので最初敬遠したが、よくみると湯気がたっている。ホットミルクであった。野性味があって大変おいしかった。満足。

朝は 10 時半にピックアップしてもらい、車で 30 分。空港近くにハイテク企業の団地があり、その中の生命科学研究所に案内された。小高い丘の上にある見晴らしのよい、緑の多い素晴らしい環境の中に、IT やバイオテクノロジーの会社、研究所が集結していた。最近バスク地方の政策として作られたもので、Fernando はこの企業の役員でもある。新しい建物の中には最新の研究施設があり、生化学、分子生物学、組織学、動物実験の施設など、研究員が忙しそうに働いていた。特に感心したのは動物実験施設。厳密な管理下にあり、大変な維持費がかかるという（毎月の運営費は？千万円）。



転移腫瘍を含む肝組織を扱うスタッフ

Fernando はこの恵まれた研究環境で癌の転移を研究できるのである。しかし、2, 3 年後に売れるものが開発できるかどうか、その責任も担っているのだ。

さて、立派なオフィスの中でプログラム委員会が始まった。まず、アウトラインを午前中に決めた。昼食はバスク大学の来賓用食堂でご馳走になった。2 時から始まって、なんと 5 時近くまで！それも大変なボリュームである。もうこれ以上食べられないほど満腹で、もう夕食も兼ねたようなものであった。大食家のボブも「スペインはいつもこれなんだ。」と呆れ顔。



プログラム委員会。和気藹々のなかにも厳しい雰囲気

5 時から再開。お腹が苦しくて、どうなることかと思っただが、4 人の協力で 8 時に完成。

ホテルに戻っても、まだ外は明るい。夜9時から、Bea たちスタッフが街中の広場のバーに案内してくれた。バーで飲み物とつまみをはしごするのである。金曜の夜のせい、多くの人たちでにぎわっていた。一般庶民の楽しみなのである。12 時過ぎまで雰囲気を楽しんだ。

それにしても、長い一日であった。



Fernando のスタッフとともに

6月5日

今日はまずツアーの候補地を訪れる。Fernando の車でビルバオ港へ。途中で錆れた工場を見る。ここは工場地帯であるが、環境汚染と経済不況で朽ち落ちた工場がたくさんあるのである。港に注ぎ込む川を境に、貧しい工員の居住と、裕福な人の居住がくっきり分かれている。われわれは裕福市民の側の岸から大きな橋のような鉄柱の建造物にやってきた。何て変わった橋だ。渡る部分が余りにも高い。よく見るとエレベーターで上がっていくのだ。と思うと、そのつり橋みたいな部分の下に渡し舟がぶら下がるようにあるではないか。ゴンドラのようなものがこの橋からぶらさがったようにしてあるのだ。これは1890年に建造された transporter bridge なのである。それで人も車も運ばれるのである。これだと船の往来に支障がない。Bizcaya のつり橋ともいう。橋の部分にはエレベーターで昇り、歩くことができる。橋の上からみる眺望は絶景である。ここを学会の午後のツアーにしようという Fernando の考えで、ここなら皆喜ぶであろう。今日も素晴らしい天気、雲ひとつない。



世界最初の運搬用吊橋

戻る途中でスーパーマーケットへ。そこでパートはワインを1ダース仕込んだ。ノルウエーに比べると税金を払ってもずっと安いのだそうだ。それにしてもどうして運んでいくのかな。

口演会場となるグッゲンハイム美術館の中で昼食。シンポジウムの夕食会場の下見でもある。ここはペアが相手をしてくれた。外に出てコーヒーを飲んでいるとエルピーダが来て、グッゲンハイム美術館内を案内してくれた。ホテルで別れたが、こちら風に抱擁の挨拶も大分慣れた。こうして、スタッフ総動員で歓迎してくれた3日間の滞在も無事終了した。スペイン料理も堪能した。間違いなく日本人が喜ぶ味で、量的にも圧倒される。天候にも3日とも恵まれ、素晴らしい風景も楽しむことができた。9月にも好天が迎えてくれることを期待したい。

Fernando 会長は極めて多忙で、われわれを車で案内してくれている最中にもしょっちゅう携帯電話がなり、高速道路を運転しながらいろいろ指示をしていた。ちょっと怖かったが、それほど忙しいということだ。最後に Fernando の言葉が印象に残った。

「われわれは同じ学問的目標を持っているために、長い付き合いができ、友情を深めることができた。こんなことは世の中でなかなかできることではない。このシンポジウム開催もそのひとつのステップになると思うとやりがいを感じている。」

彼の若さと情熱を傾けた Bilbao のシンポジウムは必ずや成功すると確信して帰途についた。

## 日本の皆様へ

Fernando Vidal Vanaclocha



(実験室での Fernando 教授：左)

この度、ビルバオにおいて第 12 回国際肝類洞壁細胞シンポジウム (12th INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON CELLS OF THE HEPATIC SINUSOID) を開催する運びになりました。本シンポジウムでは肝臓の修復再生、線維化の分子病態生理、微小循環障害、腫瘍と類洞壁細胞の相互作用、肝の免疫反応、炎症を主な内容としております。高い水準の研究発表とともにお互いの懇親、友情を深める催しも工夫しております。

ここビルバオはスペインの北部バスク地方にあって、かつて鉄鋼業の町として栄えた都市で、交通の要所でもあり、またピカソの絵で有名な町ゲルニカも近くにあります。6月4、5日とプログラム委員がビルバオに集い、プログラムを決定いたしました。詳しくはホームページにてお知らせしますが、内藤教授からも、日本の皆様に直接お伝えいただけるものと思います。本シンポジウムにつきましては、日本の肝類洞壁細胞研究会の Sinusoidal News Letter でもご紹介いただき、ありがとうございます。日本からの参加はヨーロッパに次いで多いのですが、なお一層のご参加をいただければ幸いです。なお、この時期、ビルバオはバカンスで賑わいますので、1日も早くホテルの確保をお勧めいたします(ホームページに申し込み書類があります)。とくに、ポスター会場、昼食会場になる Ercilla Hotel が便利かと思えます。締め切り後もなるべくポスター演題は受けたいと思いますので、これからでも奮ってお申し込み下さい。

日本の皆様の参加を心からお待ちしております。

2004. 6. 6

Prof. Fernando Vidal Vanaclocha

Dept Cell Biology & Histology  
Basque Country University School of Medicine  
&Dentistry  
Leioa, Bizkaia-48940  
SPAIN シンポジウム

e-mail: X11-ischs-2004@lg.ehu.es

学会ホームページ: <http://www.ehu.es/X11-ischs-2004/>

## 私の2つの小冊子

谷川久一

最近、私は2つの小冊子を出版することが出来た。その1つは昨年日本肝臓学会（会長 久留米大病理 神代正道教授）にあわせて出版した「脂肪性肝炎—非アルコール性を中心に—」で、副題を「新しい生活習慣病」とした。最近本邦における肥満者の増加と共に、この非アルコール性脂肪性肝炎（NASH）が非常な勢いで増加していることから、日本肝臓学会1万の会員にメッセージとして、この疾患がこれからの本邦の主な肝臓疾患になることを確信しての啓蒙書として書いたものである。幸いにしてこの書も好評であったが、何よりも嬉しい事は NASH あるいは肝疾患と酸化ストレスといった問題が、急速に本邦でも診療や研究の対象となってきたことである。NASH の発症の機序に関しても類洞壁細胞が関わっていることは間違いないが、私の興味は、脂肪肝から NASH になると、肝シンチや Levovist を用いた造影エコーで肝の造影不良がみられることで、これは NASH になると Kupffer 細胞の取り込み能の低下を意味するものである。慢性のアルコール性肝障害でも同様の変化がみられることから、そして NASH では組織学的にアルコール性肝障害と類似の所見が見られる事など、両者の病態に共通のものがあることは間違いない。

私共はかつてラットの慢性アルコール投与実験で、電顕で Kupffer 細胞をみると、多くの物の取り込みのため胞体が2倍以上にふくれてみられ、おそらく腸管の透過性亢進のため、門脈を介して多くのものが流入し、Kupffer 細胞に取り込まれたのではないかと推測した。したがって NASH でも同様なことがみられるかもしれない。アルコール性肝障害にしろ NASH にしろ、その病態形成に腸管由来のエンドトキシンなどの関与が重要である点から、この方面での研究が進むことが望まれる。

第2冊目は、「肝発癌の諸因子—なぜC型慢性肝障害では高頻度に発癌するのか？そしてそれを予防するには—」である。この内容は、昨年末の第17回肝類洞壁細胞研究会（当番世話人 有井滋樹教授）の際、Prof. Ichida Memorial Lecture の折に述べた講演を膨らませたものである。この内容は副題からも明らかのように、本邦におけるC型慢性肝障害は放置すると殆どの方々が最終的に肝細胞癌を発症する。この様に高頻度に発癌する疾患が他にないのは勿論であるが、なぜこの様に高頻度に発癌するのか、という謎解きの本である。

今回の第40回日本肝臓学会は、東大の小俣政男教授の主催で開かれたが、そのテーマは肝癌の撲滅であった。したがって、この主旨にもあてはまることから、これにあわせてこの本を出版した。その評判はまだ聞いていないが、本の第1号を送った小俣教授からは、大変勉強になったという便りを戴いた。ぜひ本邦における肝癌の撲滅のためにも多くの方に読んで欲しいと願っている。

さてこの本の内容の中で類洞壁細胞の重要性についても述べているが、その1つとして肝星細胞に関することがある。なぜ肝臓ではビタミンAを多量に含む星細胞が多数存在するのかという命題に関して未だ充分な答えがない。最近、鳥取大の汐田教授らの報告で、レチノイン酸リセプタードミナントネガティブフォームを発現するマウスでは高率に脂肪性肝炎から肝細胞癌が発生したというものがあり、その原因として強い酸化ストレスの亢進をあげている。すなわち肝細胞の代謝にビタミンAの存在が欠かせない事を意味するものである。ビタミンAの新たな役割の研究が望まれるが、肝硬変になるとこの細胞は線維芽細胞化し、ビタミンAを含む脂肪滴が失われ、肝臓でのビタミンAが著しく減少する。肝硬変で発癌が多くみられる原因の1つであるかもしれない。

現役の時に比べて時間的に多少余裕があることは何と楽しいことか。いろいろな考えをめぐらせていると、時のたつのを忘れてしまう。どの肝臓の疾患においても、これらをよく理解するのに類洞壁細胞の研究が重要であることを再認識している次第である。（2冊ともアークメディアからの出版）

### 脂肪性肝炎 非アルコール性を中心に 新しい生活習慣病

谷川久一 著



### 肝発癌の諸因子

なぜC型慢性肝障害では  
高頻度に発癌するのか？  
そしてそれを予防するには—

谷川久一 著



## 編集後記

第12回国際肝類洞壁細胞シンポジウム（2004年9月5日～9日）も近くなり、演題発表予定の会員には準備にお忙しいことでしょう。先日現地で開催されたプログラム委員会に、国際組織委員の内藤教授が出席されましたので、その様子を詳しく報告していただきました。また会長の Vidal-Vanaclocha 教授から日本から一人でも多く出席してほしいというメッセージも届きました。これらの記事を参考にして奮ってご参加されますよう。このシンポジウムの様子は次号でお届けする予定です。さらに谷川先生に最近の御出版について記事をお願いしました。二著ともに肝臓病学の重要課題をわかりやすく解説したもので、多くの方々にお薦めします。（和気健二郎）

## SINUSOID NEWS 編集部

160-0004

東京都新宿区四谷 3-2-7 第3 富沢ビル 4F

(株)ミノファージェン製薬 肝臓リサーチ・ユニット内

FAX: 03-3355-6573

E-mail: wake@minophagen.co.jp

印刷：肝類洞壁細胞研究会事務局（担当：福田）

839-0861 久留米市合川町2432-3 国際肝臓研究所内

TEL: 0942-31-1231, FAX: 0942-31-1232

E-mail: tanikawa@kurume.ktarn.or.jp